
傘泥棒は連鎖する

cokoly

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傘泥棒は連鎖する

【ZPDF】

N1612D

【作者名】

cooky

【あらすじ】

傘を盗まれた僕はコンビニの前で他の傘を持つていろいろかどりかといふ些細な悩みで躊躇していた。するとあこがれの優里が話しかけてきた。

傘が無い。

僕の目の前には傘がいっぱい詰まつた「コンビニの傘立て」があり、僕の背後では雨がざあざあと降つてゐる。そして僕がここまでやつて来た時に差していした傘は、傘立てからは消えていた。

おそらく、ほほ間違いなく、誰かが持つて行つたのだろう。

僕は、誰でも心に秘めているはずの、些細でありがちな邪心と良心の狭間で揺れていた。

「傘は天下の回りものです」

と後輩が言つた言葉を思い出していた。

「特にビニール傘という物はみんなで共有するべき物です」
ヤツはのほほんとした口調で、それが当然、と晒つ顔をして言いつつ切つた。

確かに、ビニール傘に強いこだわりを持つてゐる人間はあまり存在しないだろう。ワンタッチ式だとか、ちょっと色がくすんでいるとか、そんな違いはあるものの、あらゆるビニール傘は『ビニール傘』として一括りにされてしまいがちだし、実際僕も何の気なしに他人のビニール傘を間違えてもつて返つてしまつた事はある。

誰でも傘泥棒になれるのだ。そして、そんな可能性をみんな平等に持つてゐる。

もし仮にその可能性を不可避のものとして公式に認め、「傘泥棒はしようがないのだ」という事になつたとして、それが社会的な問題に発展する事はほとんどゼロに近いのではないか。

そんな事をいちいち考えている人間は居ないだろうが、世界中の無邪気な傘泥棒たちは頭のどこか片隅で無意識にそのような言い訳を自分にしているに違いないのだ。

ビニール傘をなくしたら、他のビニール傘を使えば良い。という

常識。

しかしやはり考えてほしい。

そうやつて連鎖的に発生する傘泥棒たちの陰に隠れるように、間の悪い誰か一人は確実に持つべき傘をなくしてしまつのだ。

「ちょっとすみません」

僕が傘立ての前であれこれ考えていると、一人の女性が横から手を伸ばして傘立ての中から一本引き抜いた。僕は傘立てを利用する人たちの邪魔をするような位置に立つていたのだ。

「ああ、すみません」

ふと女性の顔を見ると、それは大学で同じ講義を受けている浜宮優里だった。

優里も僕の顔に気付いたようだ。

「伊藤君、だっけ？」

驚いた。彼女が僕の名前を知っているとは思わなかつた。同じ講義を受けているとは言え、クラスは違うし、サークルなど、他に僕と彼女の接点になるようなものは無いはずだ。

「浜宮さん、だよね」

確認などするまでもなく彼女の名前は僕の頭にしつかりと刻まれていたのだが、僕はそんな言い方をしてしまつた。僕は焦つている。動搖している。でも嬉しい。彼女が僕を知つていた。

「何してるの？ 傘立ての前で突つ立つちゃつて

「持つてされたみたいなんだ」

優里は、あら、と言う顔をした。

「どこ行くの？」

「駅まで」

「私も。一緒に入つていきなよ」

そう言つて優里はほんの少し傘を僕の方に傾けた。

こんな偶然があるなんて。僕はやはり安易に他人の傘を持つて行かなくて良かつたのだ。

「ねえ、もし暇だったら、ちょっと買い物に付き合つてくれない？」

と優里が言つたので、僕はもちろん即座にオーケーした。

「良い傘だね」

と僕が褒めると、優里はちゅうりと舌を出して、

「実は私も盗まれたの。頭に来ちゃって誰のか知らないけど持つて
来ちゃった」

と言つて僕にいたずらっぽい笑顔を向けた。

僕はほんの少し良心が傷んだが、優里の笑顔には敵わなかつた。

```
>a href="http://novel.blogmura.  
com/novel_short/">img src="ht  
tp://novel.blogmura.com/novel/  
short/img/novel_short88_31.gif  
" width="88" height="31" borde  
r="0" alt="にほんブログ村 小説ブログ 短編小説へ  
"/</a<
```

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1612d/>

傘泥棒は連鎖する

2010年12月2日02時24分発行